

第11章 考察

〈考察1〉

荒川区「家庭における親（保護者）の教育意識と青少年」意識調査の結果を読み解く

明石 要一（千葉敬愛短期大学学長）

〈この調査の意義は何か〉

- 1 青少年を一つの塊と捉えた調査である。これまでの子ども調査では小・中学生の学年別調査が主流であった。この調査は小学5、6年生と中学3学年を一つの塊とらえている。この視点がユニークである。アンケート調査は小学3年生から可能と言われてきた。そうすると小学3年4年生が一つの塊になる。これは「シングル・エイジ」と呼ぶことができる。これからは、この「シングル・エイジ」とここでの「青少年」を対象とした結果の比較が可能になる。
- 2 調査が単発でなく3年に一回行っている。しかも今回で5回目である。13年間の青少年の意識の変化を追うことができる。荒川区という一つの自治体が継続的に根気よく調査を行っている点が高く評価できる。その意味で青少年を理解する貴重なデータとなっている。

〈調査結果を読み解く〉

1 調査対象の特徴は何か

- 1) 荒川区ではこの13年間で一人っ子が増えている。平成20年の14.4%→令和3年の18.5%と4.1ポイント増えている。逆に「兄弟がいる」は減っている。平成20年の84.4%→令和3年の81.0%と3.4ポイント減っている。核家族化が進んでいる。
- 2) 調査は保護者も対象にしているが回答者の大半（90%強）は母親である。父親は7%強にとどまる。母親の就労形態は「フルタイム」が増えている。25.7%（平成20年）→27.0%（平成23年）→28.0%（平成26年）→31.7%（平成29年）→37.6%（令和3年）。この13年間でほぼ12%増えている。逆に「自営業等」は平成20年の16.4%→令和3年の10.3%と減っている。「パートタイム等」はコロナの関係が前回の平成29年より42.5%→37.4%と若干減っている。

2 生活習慣と学校・放課後の過ごし方はどう変わったか

- 1) 起床時間と就寝時間の変化——遅起きが増えている。就寝時間はあまり変化ない。
起床時間の大半は「7:00~7:29」である。しかし6時台の早起きが減っている。例えば、「6:30前」の者は19.4%（平成26年）→18.3%（平成29年）→16.1%（令和3年）と3.3ポイント減る。一方、遅起きといわれる「7:30以降」は平成29年の9.7%→令和3年の14.1%とほぼ5ポイント増えている。

2) 食事はどうなっているか——朝食を毎日食べない人が15%近くいる。

それには、二つの理由がある。一つは「朝起きるのがおそくて、食べる時間がない」39.4% (平成20年)、40.0% (平成23年) > 36.8% (平成26年) > 34.4% (平成29年) > 30.6% (令和3年) と数値が減少している。

もう一つは、「食事が用意されていない」である。次のように5ポイント減っている。13.1% (平成20年) > 13.0% (平成23年) > 10.3% (平成26年) > 9.6% (平成29年) > 8.1% (令和3年)。

3) 家族団欒の夕食が増える

特徴的なのは父親の参加が今年度増える。平成29年の43.7%が令和3年の53.8%と10ポイントも増加する。ちなみに、母親も平成29年の81.4%→令和3年の83.8%と増えている。これはコロナ禍の影響と見てよいだろう。

4) 基本的な生活習慣はつくられている

家族への挨拶で「しつけ」を診断する。「おはよう」「いただきます」「ごちそうさま」「行ってきます」「ただいま」「おやすみなさい」という挨拶ができていれば、基本的な生活習慣は確立できているだろう。しかも「ご飯の前に手を洗う」「寝る前に歯磨きをする」もできており、「言われなくても宿題をする」者も増えている。データは割愛するが、ほとんどの数値がこの13年間増え続けている (p.17 図1-13を参照)。これは貴重な結果である。

5) 親のしつけができています

生活習慣が確立しているのは、保護者の「しつけ」がしっかりされているからである。「寝る前の歯磨き」「ゲームをする時間」「携帯電話・スマートフォン等をする時間」「勉強時間」に関するルールを設けている家庭が13年間増えている。ちょっと気になるのは、「門限」と「友達の遊ぶ時間」への関心が13年間減り続けている、ことである。

6) 学校生活は満足している——85.5%に達している

学校に「とても満足している」者は25.9% (平成20年) < 29.5% (平成23年) < 35.9% (平成26年) < 39.2% (平成29年) < 41.6% (令和3年) と13年間で15ポイントも増え続けている。

7) 学校に満足しているのは、「授業がよくわかる」と「先生が私の話をよく聞いてくれる」と「今のクラスの雰囲気が好き」の数値が13年間で増え続けている、からである (p.24 図2-7を参照)。

8) 遊ぶ友達の人数は減っていく。遊び集団のサイズが小さくなる。

学校の中でよく遊ぶ友達が「10人以上いる」者は、次のように減っていく。

54.0% (平成20年) > 37.6% (平成23年) > 30.6% (平成26年) > 28.7% (平成29年)

>26.8%（令和3年）。13年間で3割弱減っている。

遊び集団のサイズが平成26年ごろから小さくなりつつある。「1～2人」と「3～5人」が4割を超え始める。

9) 放課後何をしているか——「パソコンやスマートフォン・ゲーム機で遊ぶ」と「家族とおしゃべりをする」と「学校の宿題以外の勉強をする」の数値は増えている。

意外なのは「友達とラインなどをしたりメールをしたりする」（21.2%平成20年>13.6%令和3年）が減っていることである。「友達と遊ぶ」（59.4%平成20年>47.0%令和3年）数値の減少と結びついているのかもしれない。ゲームは一人でもできるが、ラインやメールは友達がいないとできない。

こうした青少年の行動は保護者のデータからも説明できる（p.29 図3-2を参照）。

3 夏休みの過ごし方はどうであったか

1) 野外体験が少ない——7割を超える者が「全くしていない」

令和3年から新しく加わった項目である。この夏休み、野外活動を体験したことが「全くない」者が73.8%と7割を超えている。野外体験はキャンプ、山登り、ハイキングなどを聞いている。そして、学年が進むにつれて数値が増加する。小学5年の67.7%が中学3年では82.5%と8割を超える。コロナ禍を考慮しても体験者が少ないのが気になる。

2) 動植物の観察体験——「全くしない」者が60.7%

身近な体験活動もしない者が多い。そして学年進行とともに数値が増加する。小学5年の50.4%から中学3年には73.1%に達する。

3) 夏休みはリラックスしたか——「いつもリラックスした」が4割弱いる

この夏休みは「ぐっすりと休め、気持ちよくめざました」（37.6%）、「明るく、楽しい気分で過ごしている」（37.3%）、「落ち着いたリラックスした気分で過ごした」（37.9%）、と答えている。数値はともに「いつもそうだった」である。多くの者が快適な夏休みを送っているようだ。

4 コロナ禍の親子関係はどうであったか

1) コロナ禍の受け止め方はどうか——家族と友人の大切さを実感する

コロナ禍は非日常的な体験である。青少年はどんな受け止め方をしたのだろうか。

「友達の大切さを感じるようになった」・・・61.9%

「家族の大切さを感じるようになった」・・・57.7%

「対面でのコミュニケーションは大切だと思うようになった」・・・44.5%

「学校の大切さを感じるようになった」・・・39.1%

やはり「友達」と「家族」の大切さを感じているのがダントツである。

2) 親子関係はどうなっているか①——親子の絆は深まっている

コロナ禍になって親子関係はどう変わったか。

親との積極的なかかわりは増えている

「親（保護者）と一緒に食事をする時間が増えた」・・・39.5%（「全くそう」と回答した割合、以下同様）

「親（保護者）とよく話すようになった」・・・29.9%

「親（保護者）と一緒にテレビなどを楽しんだりする時間が増えた」・・・26.4%

そして、消極的なかかわりの数値は減っている。

「親（保護者）との口ゲンカが増えた」・・・10.3%

「親（保護者）に放っておかれるようになった」・・・1.9%

親子の絆は深まっている。

3) 親子関係はどうなっているか②——褒められる回数が増える

これは経年変化が読み取れる項目である。

4項目中で3項目プラスに推移する。

「親（保護者）にほめられる」22.8%（平成20年）<28.0%（平成23年）<31.6%（平成26年）、31.4%（平成29年）<35.0%（令和3年）。褒められることが13ポイントほど増える。

「家族と話をする」67.3%（平成20年）<72.4%（平成23年）<75.5%（平成26年）、74.6%（平成29年）<77.8%（令和3年）。話すことが10ポイントほど増える。

「親（保護者）にしかられる」43.0%（平成20年）、45.0%（平成23年）、43.9%（平成26年）、40.8%（平成29年）、35.1%（令和3年）と、10ポイントほど叱られることが減る。

4) 親の子どもへのかかわりはどうなっているか——「勉強」と「学校生活」に関心が向く

保護者のかかわりは8項目聞いている。その中で数値に際立った変化が見られるのは次の2項目である。

「勉強をみてあげることが多い」34.8%（平成20年）<41.4%（平成23年）、38.4%（平成26年）<40.0%（平成29年）<43.2%（令和3年）。13年間でほぼ10ポイント増えている。

「学校行事以外でも子どものことでよく学校に行く」23.0%（平成20年）>21.7%（平成23年）>20.6%（平成26年）、21.4%（平成29年）<31.4%（令和3年）。13年間で8ポイントの「差」が見られる。とりわけ、令和になってからこの傾向が増えている。

親たちは「勉強」と「学校生活」のことに関心が増えている。そのほかのかかわり合いはこの13年間変わらずうまくいっているようだ。子どもの話を聞くようにしており、友達のことよく知っており、手伝ってもらったら「お礼」を言うようにしつけている。

5 子育てに関する意識はどう変わったか

1) 子どもに対する期待はどう変わったか——「いろいろなことを経験してほしい」が83.2%

親（保護者）は子どもに「将来のことをあまり急いで決めず、できるだけいろいろなことを経験してほしい」と望んでいる。そして「子どもはできるだけ早く自分の将来の目標を決めて、それに向かって努力してほしい」と思わなくなっている。さらに「子どもが大人になっても、親（保護者）の経済力があれば、生活の援助をしてもよい」と思うようになっている。

モラトリアム（猶予期間）でよいと思っている。

しかし、気になるのは次の項目の数値の増加である。

「できれば、子どもとのめ事を避けたい」46.7%（平成20年）<48.9%（平成23年）<50.3%（平成26年）<57.5%（平成29年）<65.0%（令和3年）。

「子どもの日常生活に立ち入らないようにしたい」16.2%（平成20年）<17.2%（平成23年）<20.5%（平成26年）<27.2%（平成29年）<31.8%（令和3年）。

子どもと正面から向き合う姿勢が崩れかけているのかもしれない。

2) 育てたい子ども像——「責任感」「我慢強い」「明るい」が減少する

平成29年と比べると、「創造的」（22.4%<28.1%）と「自分の意見が言える」（71.9%<74.8%）が増えている。ところが、気になるのは、13年間を見ると、次の項目で数値が減少している。

「責任感がある」72.1%（平成20年）、72.5%（平成23年）>61.2%（平成26年）>59.8%（平成29年）>56.6%（令和3年）

「我慢強い」49.1%（平成20年）>48.2%（平成23年）>40.3%（平成26年）>36.3%（平成29年）>28.1%（令和3年）

「明るい」71.6%（平成20年）>71.5%（平成23年）>63.5%（平成26年）>61.8%（平成29年）>59.3%（令和3年）

とりわけ、「我慢強い」は20ポイントを超えて数値が低くなる。明るくて責任感があり、我慢強い子どもを追い求めなくなっている。

3) 子どもの人生にとって重要なことは何か——「好きなことをする余裕を持つこと」と「チャレンジすること」

親たちは子どもの人生で重要なことは、「好きなことをする余裕を持つこと」と「世の中のいろいろな問題にチャレンジすること」である、と思うようになっている。

一方、「良い結婚相手を見つけ、幸せな家庭生活を送ること」が平成20年～平成29年で約53%の支持を維持していたが、令和3年では、41.7%に減少した。また、「子どもを持ち、育てること」が平成20年の40.0%から令和3年の21.0%に減少し、令和3年になると子育てへの期待は20ポイント近く少なくなる。

4) 子育ての悩み相談は誰か——配偶者がトップ

令和3年になると子育ての悩み相談は「友人」（62.6%平成29年>54.4%令和3年）が減り、「配偶者・パートナー」が（71.2%平成29年<74.2%令和3年）増える。

6 自己評価はどうなっているか

日本の青少年の自己肯定感が低いと指摘されている。

1) 荒川区の青少年はどうであろうか。——自己肯定感、高まる兆し

「自分自身が好きだ」「自分自身をほめることができる」という自己肯定感を支える項目の数値は、平成29年に比べると5ポイント程度増加している。しかし、気になるのは「将来への希望を持っている」では77.5%（平成26年）>69.6%（平成29年）>67.1%（令和3年）と10ポイントほど低下する。明るい将来像は描けそうにもない。

2) 性格の特徴をどう見ているか——人の話を聞き、感謝の言葉が言える

「人の話をよく聞いて理解しようとするほうだ」の数値が伸びている。平成20年の55.1%から令和3年の76.1%に、13年間で20ポイント以上増えている。聞き上手になっている。そして「人に助けてもらったら感謝の言葉をきちんと伝えるほうだ」が88.5%と高い数値を維持している。聞き上手だけでなく伝え上手にもなっている。

ところが、気になることもある。それは「まわりの人の意見によく影響されるほうだ」が令和3年に7.7ポイントほど増加する。だからであろうか。「リーダーになるより従うほうだ」の数値が13年間で33.7%から42.6%とほぼ10ポイント増える。

7 インターネットの利用はどうなっているか

1) インターネットに接続できる機器の所持——93.8%に達する

平成26年から増えている機器は、「スマートフォン」42.0%（平成26年）<61.2%（平成29年）<69.3%（令和3年）と「タブレット」29.6%（平成26年）<39.6%（平成29年）<42.6%（令和3年）である。

なぜ持たせるかといえば、「すぐ連絡が取れるので便利」がトップに来る。そして、増え続けている理由は「ほかの子どもが持っているから」と「子どもとのコミュニケーションを図るため」となる。

持たせない理由は、「費用がかかるから」でなく「弊害が多いから」が増えている。

2) スマートフォンで利用する機能は何か——多岐にわたる

「インターネット」が一番多いが、それに「動画」「ゲーム」「ラインなどのSNS」「音楽」「通話」が半数を超えている。利用は多機能にわたる。しかもこれらの数値はこの6年間で増え続けている。

インターネットの利用目的は「調べもの」（令和3年84.8%）がダントツである。親（保護者）としては、「利用料金」より「利用時間」に関心がいくようになってきている。そして、1日の利用時間を決めている家庭は令和3年には61.5%（「1時間以内」～「5時間以上」の合計）に達している。また、インターネットにアクセスする内容のルールが決められている家庭も60.7%と6割に達している。

3) SNSの利用についての「不安」に親（保護者）と子どものずれがある

「不安」があると答えた子どもは1割にとどまる。しかし、親（保護者）の「不安」は64.6%と6割を超える。そしてその内容は「ネットいじめ」（69.3%）と「個人情報の流失」（60.1%）が双璧をなしている。

8 荒川区への愛着はどうなっているか

1) 住んでいる街は好きか——児童・生徒、保護者ともほぼ9割が好き、と答える

住んでいる荒川区への愛着度は13年間変わらず高い位置を保っている。内訳は「好き」が半数、「まあ好き」4割強である。

2) 荒川区でどんな生活をしたいか——街のために役立ちたいが、地域では仕事をしたくない。

荒川区は「好き」である。そして、4割弱の者が将来も住み続けたいと思っている。さらに半数の者が街のために役立ちたいと思っている。

しかし、気になるのは、「将来、いま住んでいる地域で働きたい」と思っている者が2割強にとどまり、また、お祭りなどの地域の行事への参加が減少し始めている、ことである。地域への関心の減少は児童・生徒だけでなく、親（保護者）たちにも言える。「あらかわの心の推進運動」をよく知っている者は1割ほどである。また「おせっかいおじさん、おせっかいおばさん」という言葉をよく知っている親（保護者）は13年間で37.6%から24.4%と13ポイントも減っている。

今回のデータを要約する。

宵っ張りが増え朝起きるのが遅くなる者は増えつつあるものの、父親も参加する家族団欒の夕食は増えている。家庭のしつけもきちんとされており、基本的な生活習慣の土台となる「挨拶」もできている。

学校生活も大半の者が満足している。先生の授業はよくわかり、話も聞いてくれている。今のクラスの雰囲気も良好である。こうした傾向は13年間で増えつつある。

ところが、気になるのは遊ぶ友達のサイズが小さくなっていることである。そして放課後でも、友達との交流が少なくなっている。外遊びだけでなく、メールやラインでの交流も減り、一人で遊ぶゲームが増えている。コロナ禍ではあるが、夏休みの野外活動も少なくなっており、身近な動植物の観察も減っている。

コロナ禍は肯定的な面もうかがえる。友人や家族、そして学校生活の大切さを実感する。特に親子関係が深まり、家族のきずなが生まれている。ところが、新しい子どもへの期待が芽生え始めている。子どもへの期待はいろいろなことを経験して、「好きなことをする余裕を持つこと」であり、責任感や我慢強さ、それから明るさは求めない。子どもの結婚や子育てにも関心がない。モラトリアムを容認する親（保護者）が増えている。

荒川区の青少年の自己肯定感が高まる兆しが見られる。聞き上手、伝え上手も生まれ、街への愛着心もある。荒川区が好きで地域に住み続け、将来役に立つことをしたい、という。ところが、荒川区内での仕事は敬遠されがちである。荒川区に「住み」、「仕事をして」、「地域を元気にする」青少年の育成が課題となるだろう。

〈考察2〉

親子関係と青少年の肯定的意識との関係

池田 幸恭（和洋女子大学教授）

1 親子関係と青少年の肯定的意識への着目

本節では、令和3年度荒川区「家庭における親（保護者）の教育意識と青少年」意識調査（以下、本調査）の追加分析を行うことで、親子関係と青少年の肯定的意識との関係について明らかにすることを目的とする。親子関係と青少年の肯定的意識との関係へ着目する背景を図 11-1 に示した。

平成 29・30・31 年改訂学習指導要領では新しい時代を生きる上で必要な力として、学んだことを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力、人間性など」、実際の社会や生活で生きて働く「知識及び技能」、未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力など」を三つの柱として述べている¹⁾。さらに「総合的な学習（探究）」の時間では、生産年齢人口の減少、グローバル化の進展や技術革新等の変化の激しい社会に対応して、探究的な見方・考え方を働かせ、横断的・総合的な学習を行うことをとおして、よりよく課題を解決し、自己の生き方を考えていくための資質・能力を育成することを目標にしている²⁾。

また、2020 年から拡大したコロナ禍の中で、生活様式に大きな変化が生じている。学校教育でも遠隔授業の導入が推進され、外出自粛や自宅待機の影響によって家庭で親子が過ごす時間も増えている。コロナ禍の影響で「親（保護者）とよく話すようになった」「親（保護者）と一緒に食事をする時間が増えた」という質問に「全くそうだ」「まあそうだ」と回答した児童・生徒の割合はいずれも約7割となっていた（p.42 図 5-8）。内閣府による『新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査』でも、18 歳未満の子を持つ親は感染症拡大前の

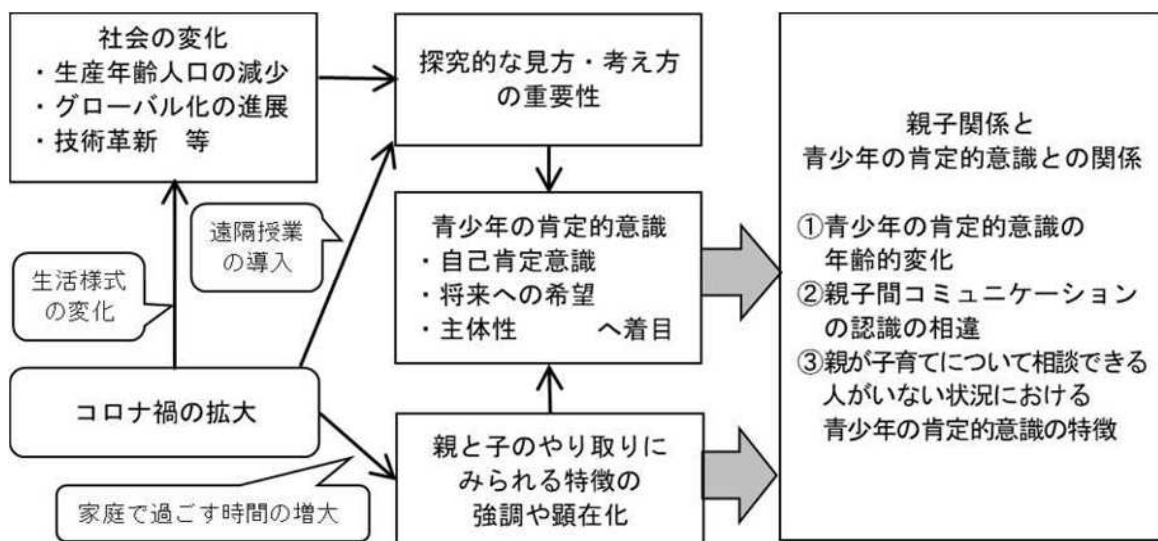


図 11-1 親子関係と青少年の肯定的意識との関係へ着目する背景

2019年12月と比較して家族と過ごす時間は増加したという回答（6%～51%以上増加）は2020年5～6月時点で70.3%、2021年9～10月時点で48.9%であることが報告されている³⁾。さらに本調査では、平成20年度から令和3年度にかけて「親（保護者）にほめられる」ことが増加し、「親（保護者）にしかられる」ことが減少していることが示されており（p.46図6-1）、親子関係に変化がみられることが指摘できる。コロナ禍によって家庭で親子が過ごす時間が増加することで、各家庭における親と子のやり取りにみられる特徴が強調されたり顕在化しやすくなったりすることが考えられる。このような社会の変化がみられる中で、家庭における親の教育や青少年の育ちを考える上では、親子関係と青少年の肯定的意識へ改めて着目することは有意義であるといえる。

追加分析にあたっては、青年期の肯定的意識として、自分自身についての評価（小中学生用問23）から自己肯定意識（「①自分自身が好きだ」）、将来への希望（「②将来への希望を持っている」）、主体性（「⑥自分の意見を持っている」）という3種類の質問への回答を取りあげる。諸外国に比べて日本の青少年の自尊感情や自己肯定感が低いことが報告されており、そこから若者の置かれている現状を理解する必要があることも指摘されている⁴⁾。また、将来への希望についても、諸外国に比べて日本の青少年は低いことが報告されている⁵⁾。さらに、探究的な見方・考え方を身につける上で、「主体的・対話的で深い学び」¹⁾につながるといえる主体性も重要になると考えた。本調査での「よくあてはまる」「まああてはまる」を合計した回答割合は、平成26年度から令和3年度にかけて、「自分自身が好きだ」は増加、「将来への希望を持っている」は低減しており、「自分の意見を持っている」は同程度であった（p.68図8-8）。自尊感情は児童期に高く青年期に下がること⁶⁾、⁷⁾、将来への希望も小学生から中学生にかけて低減することが指摘されている⁸⁾。したがって追加分析では、主に児童期にあたる小学生、青年期にあたる中学生の発達的特徴にも注目する。このような青少年の発達や教育においては、親（保護者）の子育て支援が重要になると考えられる。

これらのことから、以下の3つの分析を行う。第1に、学年を指標として、青少年の肯定的意識（自己肯定意識、将来への希望、主体性）の年齢的变化を確かめる。第2に、保護者用問8と小中学生用問24への回答について親と子のペアデータによって、親子間コミュニケーションの相違を小学5・6年生と中学生ごとに検討する。第3に、保護者用問10「あなたは、子育てのしかたやしつけなどについて悩んだとき、誰と相談していますか」へ「相談できる人がいない」を選択した親（保護者）に着目して、子育てについて相談できる人がいない状況における青少年の肯定的意識の特徴を明らかにする。

2 青少年の肯定的意識の年齢的变化

自分自身についての評価（小中学生用問23）における自己肯定意識（「自分自身が好きだ」）、将来への希望（「将来への希望を持っている」）、主体性（「自分の意見を持っている」）という3種類の質問への回答について、得点が大きいほど各意識の傾向がみられるように、「よくあてはまる」を4点、「まああてはまる」を3点、「あまりあてはまらない」を2点、「あてはまらない」を1点に変換した。その上で、3種類の得点の平均値について、学年を指標として小学5年生から中学3年生までの年齢的变化を確かめた（図11-2）。

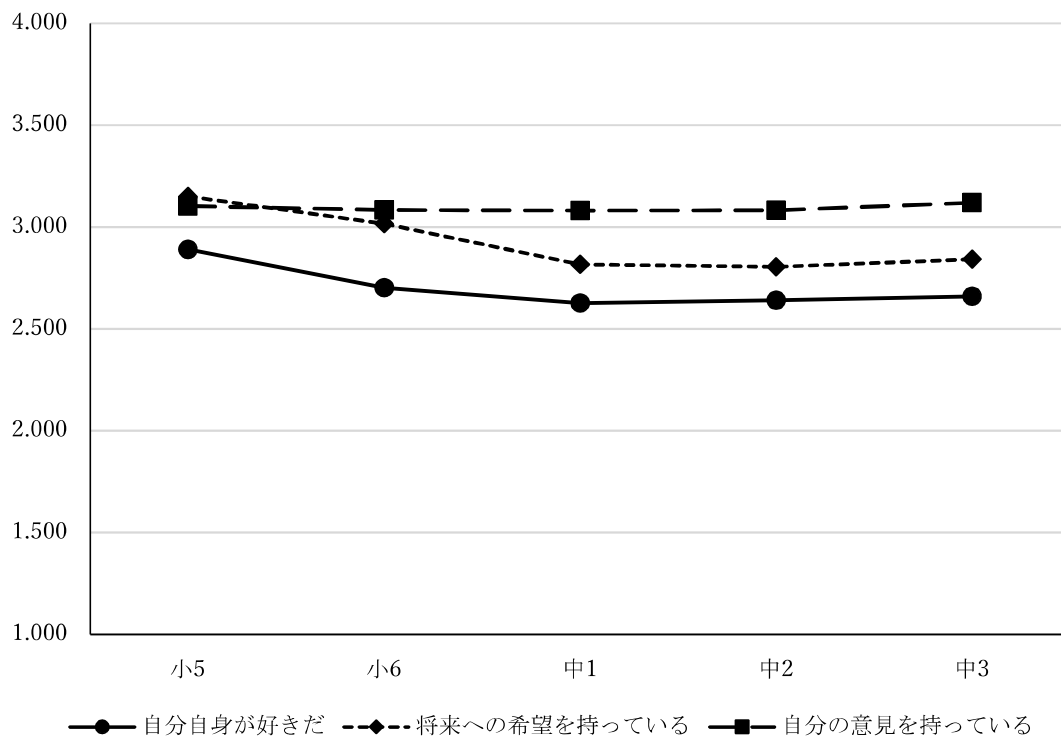


図 11-2 小学5年生から中学3年生までの自己肯定意識、将来への希望、主体性の平均値の年齢的变化 (児童・生徒回答)

注) 得点範囲は、1,000(あてはまらない)～4,000(よくあてはまる)である。

「自分自身が好きだ」と「将来への希望を持っている」の平均値は小学生から中学生にかけて低減していた。一方で、「自分の意見を持っている」の平均値に大きな変化はみられなかった^{a)}。

自己肯定意識と将来への希望が、小学生から中学生にかけて低減することは、先行研究^{6)、7)、8)}と同様の結果であった。児童期から青年期にかけて自尊感情が低減することについて、青年期には抽象的思考が可能となり、理想や可能性の世界から現実を批判的に検討できるようになることが論じられている⁹⁾。中学生になり、抽象的思考に基づく批判が自分自身へ向かうことで自己肯定意識が低減し、自身の外側の社会へ向かうことで将来への希望が低減すると考えられる。主体性については、特に「自分の意見を持っている」という感覚は年齢を経るだけでは身につかない可能性があることも指摘できる。

3 親子間コミュニケーションの認識の相違

本調査では手伝いへの礼について保護者の95%以上は言っているとしているが子どもでは8割強であったり、勉強をみることに保護者は3割程度であるが子どもは6割強が「あてはまる」「だいたいあてはまる」としていたりするなど、親子間の認識に部分的な相違があることを指摘している (p. 50 図 6-9、p. 51 図 6-10)。

ここでは本調査の図 6-9、図 6-10、図 6-11 に対して、小学5、6年生と中学生の発達的特徴について検討するために、小中学生用問 24 とそれに対応する保護者用問 8 の親子間コミュニケーション

ョンに関する9項目の認識について検討する。親（保護者）と青少年の関係に限定するために、保護者用問 29「あなたとお子さんの関係は次のどれにあたりますか」へ「父（継父を含む）」と「母（継母を含む）」と回答した5,411組のペアデータを分析の対象とした。「父（継父を含む）」が425名（7.9%）、「母（継母を含む）」が4,986名（92.1%）であった。各質問への「あてはまる」と「だいたいあてはまる」の回答割合を合算して、表11-1に整理した。

子どものふだんの生活の様子を知っていることについて、小学生と中学生の子どもと親のいずれも9割以上が「あてはまる」あるいは「だいたいあてはまる」と回答していた。親が子どもの生活に目を向けており、そのことを子ども自身も実感しているといえる。

小学生と中学生の間、あるいは子どもと親の間で5.0%以上の差がみられた結果に着目する。本調査でも指摘されていた勉強をみることについては、小学生で「あてはまる」と「だいたいあてはまる」の合計割合が69.5%であったのが、中学生では56.0%に低減していた。小学生と中学生の両方で、親の認識に対して子どもの方が「私の勉強をみてくれる」と認識していた。親が学校行事以外でも学校に行くことの認識の相違についても、同様の傾向がみられた。

また、話をよく聞くこと、手伝いへの礼については、子どもよりも親があてはまると認識していた。さらに、小学生に対して中学生は「親（保護者）は私のテストの結果を聞いてくれる」と認識しており、「親（保護者）は私の学校の授業参観や運動会などの行事に来てくれる」とは認識していない傾向がみられた。この傾向は、親も同様であった。小学生から中学生にかけて親子関係に変化が生じている可能性が指摘できる。

表 11-1 小学5、6年生ならびに中学生と親（保護者）における親子間コミュニケーションの認識の相違（児童・生徒と親（保護者）のペアデータ）

回答者	質問	小学生	中学生	5.0%以上の差
子ども	親（保護者）は私のふだんの生活の様子を知っている	93.5	91.5	
親（保護者）	子どもの普段の生活の様子を知っている	95.9	93.8	
子ども	親（保護者）は私の仲のいい友達をよく知っている	89.5	87.1	
親（保護者）	お子さんの仲のいい友達をよく知っている	89.0	84.3	
子ども	親（保護者）は私の勉強をみてくれる	69.5	56.0	小学生＞中学生
親（保護者）	お子さんの勉強をみてあげることが多い	55.9	32.1	子ども＞親
子ども	親（保護者）は私のテストの結果を聞いてくれる	78.9	87.6	小学生＜中学生
親（保護者）	お子さんのテストの結果を聞く	82.9	90.0	
子ども	親（保護者）は私の学校の授業参観や運動会などの行事に来てくれる	94.7	88.9	小学生＞中学生
親（保護者）	学校の授業参観や運動会などの行事に行く	95.1	89.3	
子ども	親（保護者）は学校行事以外でも私のことでよく学校に来てくれる	40.5	33.3	小学生＞中学生
親（保護者）	学校行事以外でも子どものことでよく学校に行く（PTA、ボランティアなど）	35.3	27.6	子ども＞親
子ども	親（保護者）は私の話をよく聞いてくれる	89.5	88.1	
親（保護者）	子どもの話をよく聞くようにしている	95.6	95.0	子ども＜親
子ども	親（保護者）は私の勉強についてよく聞いたり話してくれる	76.3	75.7	
親（保護者）	家族と子どもの教育やしつけについてよく話し合う	77.7	73.6	
子ども	親（保護者）は私に手伝いなどをしたら礼を言ってくれる	86.1	84.6	
親（保護者）	子どもに手伝いなどをしてもらったら礼を言うようにしている	96.6	95.9	子ども＜親

注) 数値は「あてはまる」「だいたいあてはまる」の回答を合計した割合である。小学生の親子は2,872組、中学生の親子は2,964組であり、未回答（小学生71～101名、小学生の親（保護者）16～26名、中学生26～52名、中学生の親（保護者）14～29名）を除いて割合を算出している。

4 親が子育てについて相談できる人がいない状況における青少年の肯定的意識の特徴

保護者用問 10「あなたは、子育てのしかたやしつけなどについて悩んだとき、誰と相談していますか」について、子どもとの関係が「父（継父を含む）」あるいは「母（継母を含む）」の 5,465 名を分析の対象としたところ、「配偶者・パートナー」が 75.1%と多くみられ、次いで「友人」55.0%、「親やきょうだい」53.4%、「職場の人」20.8%であった。また「特に悩むことはない」という回答も、4.6%みられた。「相談できる人がいない」を選択した親は、119名（父親 17名、母親 102名）で 2.2%であった^{b)}。

「相談できる人がいない」の選択有無について、保護者用問 33「今の暮らしをどのように思いますか」という主観的経済状況への回答とのクロス集計を行った（図 11-3）。その結果、子育てのしかたやしつけなどについて悩んだとき「相談できる人がいない」と回答した親の方が、生活が苦しい、あるいはゆとりがなく心配して暮らしていることが示された。

また街への意識において、本調査では荒川区で取り組んでいる「あらかわの心推進運動」を知らないとした保護者が 37.6%、「おせっかいおじさん・おせっかいおばさん」という言葉を知らないとした保護者が 21.2%であった（p. 94 図 10-12、p. 95 図 10-13）。これに対して、子育てについて悩んだとき相談できる人がいない親では、「あらかわの心推進運動」を 48.7%が、「おせっかいおじさん・おせっかいおばさん」を 31.1%が知らないと回答していた。

さらに、「相談できる人がいない」の選択有無について、保護者用問 14 ならびに小中学生用問 22 の「あなたは、幸せだと感じますか」という幸福感へのそれぞれの回答とクロス集計を行った（図 11-4、図 11-5）。その結果、相談できる人がいる親子関係と比較すると、親が子育てについて相談できる人がいないという状況では、親自身の幸福感も、子どもの幸福感も程度が小さくなる傾向が示された^{c)}。

そして、「相談できる人がいない」の選択有無によって、自己肯定意識（「自分自身が好きだ」）、将来への希望（「将来への希望を持っている」）、主体性（「自分の意見を持っている」）という 3 種類の平均値を比較した（図 11-6）。各質問への回答は、得点が大きいほど各意識の傾向がみられるように変換している。「自分自身が好きだ」「将来への希望」「主体性」という 3 種類の平均値すべてで、相談できる人がいる親子関係と比較すると、親が子育てについて相談できる人がいないという状況で得点が小さかった^{d)}。

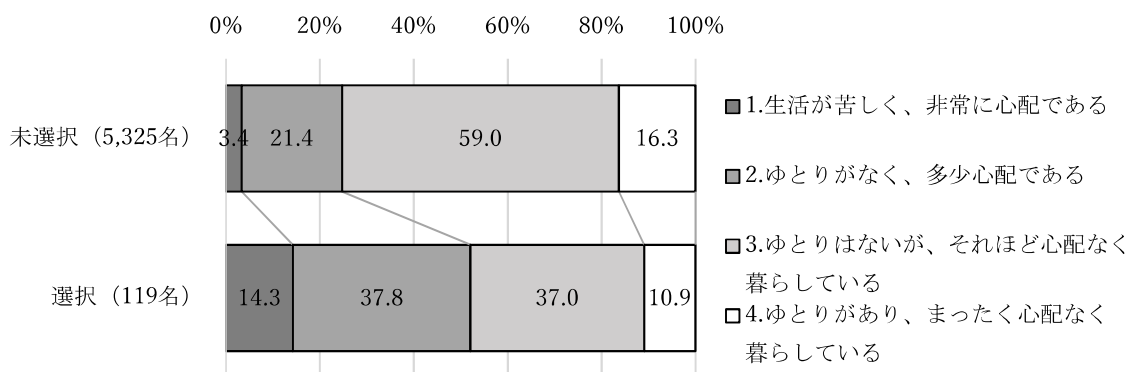


図 11-3 子育てについて「相談できる人がいない」の選択有無と主観的経済状況の関係(保護者回答)

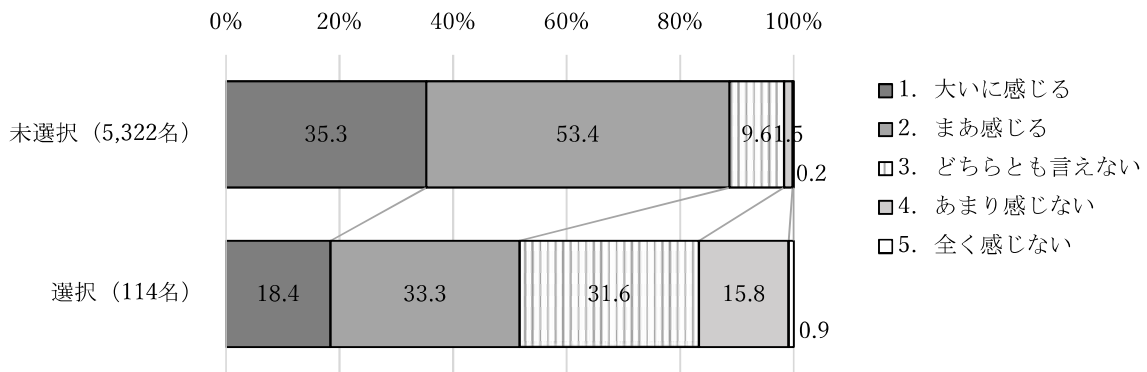


図 11-4 子育てについて「相談できる人がいない」の選択有無と親の幸福感の関係(保護者回答)

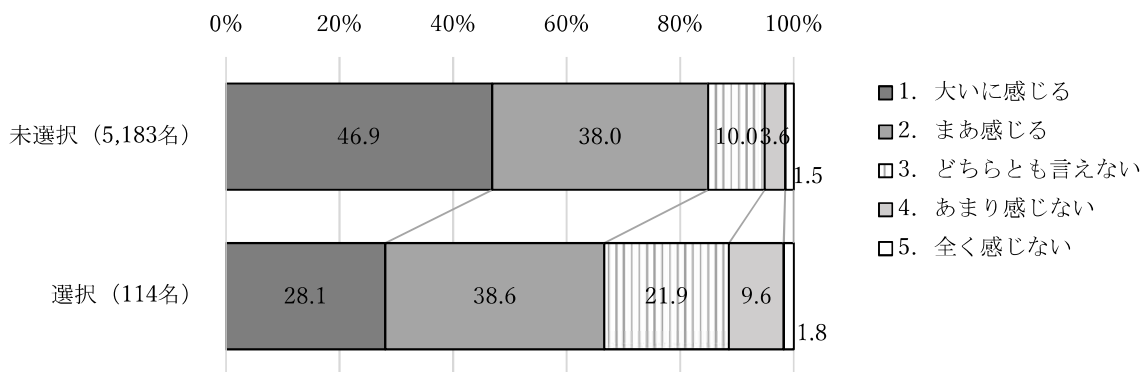


図 11-5 子育てについて「相談できる人がいない」の選択有無と子どもの幸福感の関係(児童・生徒と親のペアデータ)

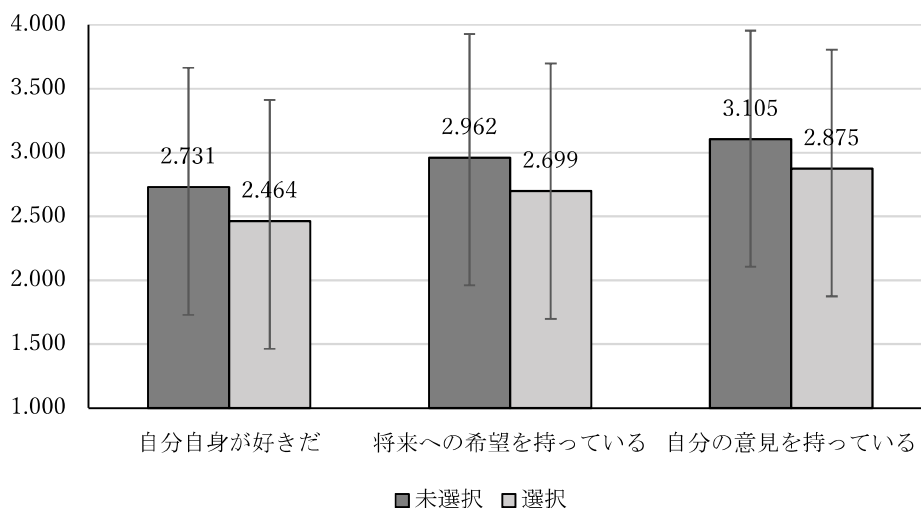


図 11-6 子育てについて「相談できる人がいない」という選択有無による自己肯定意識、将来への希望、主体性の平均値の比較(児童・生徒と親のペアデータ)

注) 得点範囲は、1.000 (あてはまらない) ~4.000 (よくあてはまる) であり、標準偏差をグラフ中の線で示した。

人数は順に、「未選択」で 5,189 名、5,194 名、5164 名、「選択」で 112 名、113 名、112 名であった。

5 親子関係と青少年の肯定的意識の発達

以上の追加分析の結果から、小学生から中学生にかけて自己肯定意識や将来への希望は低減すること、親が子どもの話を聴いたり子どもの手伝いへ礼を言ったりするなどの親子間コミュニケーションの一部に親と子で認識の相違がみられることが示唆された。そして、親が子育てについて相談できる人がいない場合には、相談できる人がいる親子関係と比べて、親自身も、子どもも幸福感が小さく、子どもの肯定的意識の程度も小さい傾向がみられた。これらの結果に基づいて、親子関係と青少年の肯定的意識の発達について、次の3点を指摘する。

第1に、青少年の発達に伴い自己肯定意識や将来への希望は低減しやすくなり、親子関係も変化していくといえる。自己肯定意識や将来への希望は、子どもが抽象的な思考が可能になったからこそ低減することがある(図 11-2)。また親子間コミュニケーションにおいても、親が子どもの勉強をみたり学校の行事や行事以外で学校へ行ったりすることは小学5、6年生よりも中学生でみられなくなっていた(表 11-1)。すなわち、子どもの肯定的意識や親子の関係そのものが、青少年の発達に伴い変化していくと考えられる。

第2に、親と子の間でコミュニケーションの認識に相違が生じることがあり、そのようなズレが生じる可能性を理解することが重要になる。話をよく聞くこと、手伝いへの礼については、子どもよりも親があてはまると認識していた(表 11-1)。親が考えるほどには、あるいは子どもが期待するほどには、子どもへの理解や感謝の気持ちが伝わりにくいといえる。一方で、小学生と中学生の子どもと親のいずれも9割以上が、親は子どものふだんの生活の様子を知っていると認識していた(表 11-1)。このように親子という身近な関係であっても、むしろ親子であるからこそ、お互いの認識にズレが生じることがあるとも考えられる。

第3に、親が子育てについて相談できる相手がいること、そのために子どもを地域全体で育てることの重要性である。先述したように、青少年が発達する中で親子関係は変化し、日々の親子間コミュニケーションの認識にもズレが生じることがある。親も子どもも、双方が親子関係の悩みを抱えることも少なくないであろう。追加分析では、子育てについて相談できる人がいない親は、生活が苦しい、ゆとりがなく心配して暮らしていることが示された(図 11-3)。そして、親が子育てについて相談できる人がいない場合には、相談できる人がいる親子関係と比べて、親自身も、子どもも幸福感が小さく、子どもの肯定的意識の程度も小さい傾向がみられた(図 11-4~6)。これらの背景として、親が子育てについて相談できないことが子どもの発達へ影響している可能性に加えて、相談ができないほどに困難な状況に親が置かれている可能性もあると考えられる。そこでは、子どもの幸福感や肯定的意識が低いことへ親が悩んだときに、そのことを相談する相手がないことでさらに悩みが深まるという負のスパイラル(悪循環)が生じることもありえる。また、子育てについて相談できる人がいない親は、荒川区で取り組んでいる「あらかわの心推進運動」や「おせっかいおじさん・おせっかいおばさん」の認知度も低かった。親が子育ての悩みを一人で抱え込んでしまうことがないように、地域とのつながりを築いていくことが大切になるといえる。

社会が大きく変化し、将来への見通しが難しい状況において、青少年の発達は進んでいく。先の見えない航路には不安も伴うが、その先には新しい世界が広がっているのかもしれない。そのような道筋において、親と子どもを支える「地域の力」がより一層重要になると考えられる。

脚注

- a) 「自分自身が好きだ」「将来への希望を持っている」「自分の意見を持っている」という3種類の得点について、学年（小学5、6年生、中学1、2、3年生の5水準）を要因とした分析と多重比較(TukeyのHSD法)を行った結果、「自分自身が好きだ」($F(4, 5738)=16.934, p<.001$)と「将来への希望を持っている」($F(4, 5743)=29.887, p<.001$)で統計的に有意な得点差がみられた。「自分自身が好きだ」の得点は、小学5年生が他のすべての学年よりも得点が大きかった。「将来への希望を持っている」の得点は小学5年生、小学6年生、中学1～3年生の順に小さくなり、中学生の間の得点差はみられなかった。ただし、効果の大きさを示す値である効果量は、 $\eta^2=.012, .020$ といずれも小さかった。また、「自分の意見を持っている」の得点には、有意な得点差はみられなかった($F(4, 5712)=0.402, p=.808; \eta^2<.001$)。
- b) 子育てのしかたやしつけなどについて悩んだとき「相談できる人がいない」の選択有無について、父親(継父を含む)と母親(継母を含む)の人数比を χ^2 検定によって分析した結果、父親は母親と比べて「相談できる人がいない」を回答する割合が大きいことが示された($\chi^2(1, N=5465)=6.645, p=.010$)。ただし、回答者全体において母親(継母を含む)が90.8%に対して、父親(継父を含む)は7.8%であり大きな差があることに留意する必要がある。なお、「相談ができる人がいない」の選択有無について子どもの学年との人数比を χ^2 検定によって分析した結果、統計的に有意な違いはみられなかった($\chi^2(4, N=5378)=6.595, p=.159$)。
- c) 子育てのしかたやしつけなどについて悩んだとき「相談できる人がいない」の選択有無について、親自身ならびに子どもの幸福感との人数比を χ^2 検定によって分析した。その結果、「相談できる人がいない」を選択した方が、親自身は幸福感を「大いに感じる」「まあ感じる」という割合が小さく、「どちらとも言えない」「あまり感じない」という割合が大きかった($\chi^2(4, N=5346)=199.097, p<.001$)。子どもも幸福感を「大いに感じる」という割合は小さく、「どちらとも言えない」「あまり感じない」という割合が大きかった($\chi^2(4, N=5297)=35.146, p<.001$)。
- d) 「自分自身が好きだ」「将来への希望を持っている」「自分の意見を持っている」という3種類の得点について、子育てのしかたやしつけなどについて悩んだとき「相談できる人がいない」の選択有無による t 検定を行い比較した。分析の結果、いずれも「相談できる人がいない」を選択した方が、得点は統計的に有意に小さかった(順に $t(5299)=2.987, p=.003; t(5305)=2.857, p=.004; t(5274)=2.831, p=.005$)。ただし、効果の大きさを示す値である効果量は、 $d=.285, .272, .270$ といずれも小さかった。

引用文献

- 1) 文部科学省. “平成29・30・31年改訂学習指導要領の趣旨・内容を分かりやすく紹介”.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1383986.htm, (参照2022年2月9日)
- 2) 文部科学省. “総合的な学習(探究)の時間”.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/main14_a2.htm, (参照2022年2月9日)
- 3) 内閣府. “第4回 新型コロナウイルス感染症の影響下における生活意識・行動の変化に関する調査”. 2021.11.1.
https://www5.cao.go.jp/keizai2/wellbeing/covid/pdf/result4_covid.pdf, (参照2022年2月9日)

- 4) 加藤弘通. “自尊感情の発達の推移とその関連要因の変化”. 我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 (平成 30 年度). 内閣府. 2019, p.149-164.
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf/s3.pdf>, (参照 2020 年 2 月 9 日)
- 5) 内閣府. “我が国と諸外国の若者の意識に関する調査 (平成 30 年度)”. 2019.
<https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/h30/pdf-index.html>, (参照 2022 年 2 月 9 日)
- 6) Twenge, J. M.; Campbell, W. K. Age and birth cohort differences in self-esteem: A cross-temporal meta-analysis. *Personality and Social Psychology Review*. 2001, 5, p. 321-344.
- 7) Robins, R. W.; Trzesniewski, K. H.; Tracy, J. L.; Gosling, S. D.; Potter, J. Global self-esteem across the life span. *Psychology and Aging*. 2002, 17, p. 423-434.
- 8) 都筑学. 小学校から中学校への学校移行と時間的展望—縦断的調査にもとづく検討. ナカニシヤ出版, 2008.
- 9) 加藤弘通; 太田正義; 松下真実子; 三井由里. 思春期になぜ自尊感情が下がるのか?—批判的思考態度との関係から. *青年心理学研究*. 2018, 30 (1), p. 25-40.

〈考察3〉

COVID-19 禍における青少年の謙虚さに関する検討

遠藤 伸太郎（千葉工業大学助教）

本章では、児童・生徒が健康に生きていくうえで重要な要因とされている強みの一つである謙虚さ^{注1)}に着目し、謙虚さの回答傾向、謙虚さの向上に関連する要因、謙虚さが何をもたらすのか検討した結果と考察を示す。具体的には、まず、自己評価の謙虚さ（小中学生調査問 23：⑦「自分の良いところと悪いところをきちんと知っている」⑧「自分の間違いを素直に認める」⑨「周りの人の気持ちを大切にしている」⑩「周りの人それぞれのよいところを認めている」）と他者評価の謙虚さにどの程度ずれがあるのか検討し、謙虚さがどのように評価される傾向にあるのか明らかにする。次に、謙虚さを向上させる要因として示唆されている自然体験（小中学生調査問 14-1：野外活動の参加、問 14-2：動植物の観察）との関連を検討した。そして、謙虚さと COVID-19 禍における気づき（成長）（小中学生調査問 15：大切さを感じたこと）、健康状態との関連を検討した。これらの結果を踏まえ、児童・生徒の謙虚さの重要性について考察した。

1 謙虚さに関する自己評価と他者評価のずれ

小中学生調査の謙虚さに関する各項目への回答と保護者調査の謙虚さに関する各項目への回答をクロス集計し、回答のずれを検討した。その結果、表 11-2～5 に示す結果が得られた。

どの項目においても、児童・生徒は「よくあてはまる」、保護者は「まああてはまる」と回答していた割合が最も大きかった。また表 11-2～5 より、「まああてはまる」という項目は、児童・生徒の回答と保護者の回答の一致率が高く、この選択肢に関しては正確に評価されている可能性がある。

前述のように、児童・生徒は「よくあてはまる」と回答する割合が多かったが、その場合、保護者は、「まああてはまる」と回答する割合の方が多かった。したがって、あてはまるという選択肢について、児童・生徒は過大評価している可能性がある。一方、児童・生徒が「あまりあてはまらない」、「あてはまらない」と回答している場合、保護者は「まああてはまる」と回答している割合のほうが多かった。そのため、あてはまらないという選択肢においては、児童・生徒が過小評価している可能性がある。

以上のことから、謙虚さの評価において、児童・生徒の評価と保護者の評価にはずれが生じていることが明らかとなった。加えて、回答状況を整理すると、前述のように児童・生徒は「よくあてはまる」と回答している割合が大きく、自身の謙虚さを正確に評価できていないと考えられた。謙虚さの測定においては自己評価よりも他者評価の方が正確であることが指摘されている（Davis, 2010）。そのため、これ以降の謙虚さに関する分析は、より正確に評価できていると考えられる保護者の回答を利用した。

表 11-2 謙虚さに関する自己評価と他者評価のクロス集計(小中学生調査:自分の良いところと悪いところをきちんと知っている、保護者調査:お子さんは自分の良いところと悪いところをきちんと知っている)

		保護者				合計
		よく あてはまる	まあ あてはまる	あまりあて はまらない	あてはまら ない	
児童・ 生徒	よく あてはまる	656 (12.35)	1380 (25.99)	393 (7.40)	21 (0.40)	2450 (46.14)
	まあ あてはまる	421 (7.93)	1149 (21.64)	402 (7.57)	19 (0.36)	1991 (37.50)
	あまり あてはまらない	103 (1.94)	371 (6.99)	161 (3.03)	9 (0.17)	644 (12.13)
	あてはまらない	34 (0.64)	112 (2.11)	69 (1.30)	10 (0.19)	225 (4.24)
	合計	1214 (22.86)	3012 (56.72)	1025 (19.30)	59 (1.11)	5310 (100.00)

※各セルにおいて、上段は全体に対する人数、下段()内の数値は、全体に対する割合(%)を示す

※太字は、児童・生徒の回答と保護者の回答が一致していることを示す

表 11-3 謙虚さに関する自己評価と他者評価のクロス集計(小中学生調査:自分の間違いを素直に認める、保護者調査:お子さんは自分の間違いを素直に認める)

		保護者				合計
		よく あてはまる	まあ あてはまる	あまりあて はまらない	あてはまら ない	
児童・ 生徒	よく あてはまる	423 (7.98)	879 (16.58)	368 (6.94)	37 (0.70)	1707 (32.21)
	まあ あてはまる	444 (8.38)	1327 (25.04)	643 (12.13)	85 (1.60)	2499 (47.15)
	あまり あてはまらない	113 (2.13)	397 (7.49)	300 (5.66)	67 (1.26)	877 (16.55)
	あてはまらない	22 (0.42)	90 (1.70)	79 (1.49)	26 (0.49)	217 (4.09)
	合計	1002 (18.91)	2693 (50.81)	1390 (26.23)	215 (4.06)	5300 (100.00)

※各セルにおいて、上段は全体に対する人数、下段()内の数値は、全体に対する割合(%)を示す

※太字は、児童・生徒の回答と保護者の回答が一致していることを示す

表 11-4 謙虚さに関する自己評価と他者評価のクロス集計(小中学生調査:周りの人の気持ちを大切にしている、保護者調査:お子さんは周りの人の気持ちを大切にしている)

		保護者				合計
		よく あてはまる	まあ あてはまる	あまりあて はまらない	あてはまら ない	
児童・ 生徒	よく あてはまる	1008 (19.06)	1227 (23.20)	157 (2.97)	14 (0.26)	2406 (45.50)
	まあ あてはまる	732 (13.84)	1364 (25.79)	253 (4.78)	12 (0.23)	2361 (44.65)
	あまり あてはまらない	97 (1.83)	231 (4.37)	87 (1.65)	9 (0.17)	424 (8.02)
	あてはまらない	18 (0.34)	49 (0.93)	25 (0.47)	5 (0.09)	97 (1.83)
	合計	1855 (18.91)	2871 (50.81)	522 (26.23)	40 (4.06)	5288 (100.00)

※各セルにおいて、上段は全体に対する人数、下段()内の数値は、全体に対する割合(%)を示す

※太字は、児童・生徒の回答と保護者の回答が一致していることを示す

表 11-5 謙虚さに関する自己評価と他者評価のクロス集計(小中学生調査:周りの人それぞれのよいところを認めている、保護者調査:お子さんは、周りの人それぞれのよいところを認めている)

		保護者				合計
		よく あてはまる	まあ あてはまる	あまりあて はまらない	あてはまら ない	
児童・ 生徒	よく あてはまる	1143 (21.58)	1475 (27.85)	176 (3.32)	12 (0.23)	2806 (52.98)
	まあ あてはまる	625 (11.80)	1237 (23.36)	193 (3.64)	10 (0.19)	2065 (38.99)
	あまり あてはまらない	72 (1.36)	204 (3.85)	55 (1.04)	3 (0.06)	334 (6.31)
	あてはまらない	21 (0.40)	44 (0.83)	22 (0.42)	4 (0.08)	91 (1.72)
	合計	1861 (35.14)	2960 (55.89)	446 (8.42)	29 (0.55)	5296 (100.00)

※各セルにおいて、上段は全体に対する人数、下段()内の数値は、全体に対する割合(%)を示す

※太字は、児童・生徒の回答と保護者の回答が一致していることを示す

2 謙虚さと夏休み中の自然体験、健康状態の関連

保護者調査の謙虚さに関する項目の合計点について、平均値と標準偏差をもとに標準得点（ z 得点）を算出し、基準点をもとに5分割（-1.57未満：非常に低い群、-1.57以上-0.59未満：低い群、-0.59以上0.59未満：中群、0.59以上1.57未満：高い群、1.57以上：非常に高い群）したものと、夏休み中の自然体験に関する項目への回答（小中学生調査問14-1：野外活動の参加、問14-2：動植物の観察）、健康状態に関する項目（小中学生調査問14-3：夏休みの心身状態）の合計点を謙虚さと同様に5分割したものをクロス集計した。その結果、図11-7～9に示す結果が得られた。

自然体験（野外活動）と謙虚さのクロス集計をみると、野外活動の頻度による謙虚さの程度に関連はみられなかった（図11-7）。したがって、夏休み中の野外活動の頻度は謙虚さに関連しないと考えられる。しかしながら、野外活動の回答の単純集計をみると、「全くしない」の割合が7割以上であった。COVID-19の影響により、野外活動そのものに参加することができておらず、参加できた場合も感染症対策により従来通りの活動ができなかったため、謙虚さとの関連もみられなかった可能性がある。また野外活動の場合、頻度だけでなく活動の体験内容が関連することが指摘されており、今後詳細な検討が望まれる。

身近な自然体験と謙虚さの関連をみると、体験頻度が少ない場合は謙虚さが低く、多い場合は謙虚さが高いことが示された（図11-8）。身近な自然体験の回答の単純集計をみると、「全くしない」の割合が6割であった。野外活動の場合、COVID-19の影響が大きかったが、身近な自然体験の場合、そこまでの影響は少なかったため、関連がみられた可能性がある。また身近な自然体験の場合、植物や、動物・昆虫を観察することで、より生物の大切さを感じ、その結果として謙虚さが高まったと考えられる。しかしながら、身近な自然体験の頻度が多い場合、謙虚さの高い群は割合が多かったが、非常に高い群の割合に違いはみられなかった。適度に謙虚さを高めるものの、大きく高めるわけではないため、より効果的な内容については今後検討する必要がある。

謙虚さと健康状態の関連をみると、謙虚さが低い場合、健康状態が低く、謙虚さが高い場合、健康状態が高いことが示された（図11-9）。謙虚さが高い場合、周りの人間関係も良好であり、様々なサポートを受けることが可能であるため、COVID-19が流行した状況でありながらも良好な健康状態を保つことができたと考えられる。しかしながら、前述の自然体験活動と謙虚さの関連同様に、謙虚さが非常に高い群の割合に違いはみられなかった。謙虚さは適度に健康状態を高めるものの、大きく高めるわけではないため、両者の関連性について今後詳細に検討する必要がある。

以上のことから、身近な自然体験は謙虚さを高め、謙虚さは良好な健康状態につながることを示された。そのため、自然体験が謙虚さを高め、その謙虚さが良好な健康状態につながると考えられる。しかしながら、変数間の詳細な関連性は検討できていないため、今後その点については検討する必要がある。

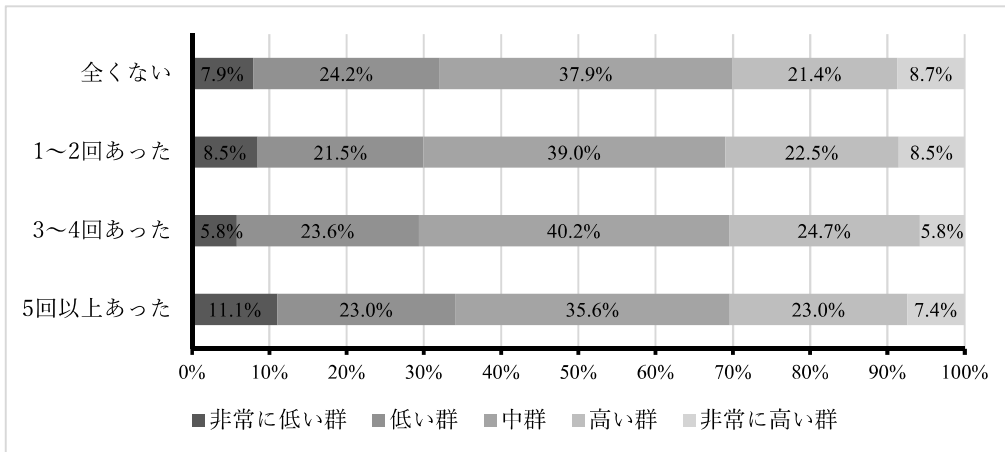


図 11-7 自然体験(キャンプ、山登りやハイキングなどの野外活動)と謙虚さのクロス集計

※縦軸は野外活動の回答を、グラフ内の5群は謙虚さを示す

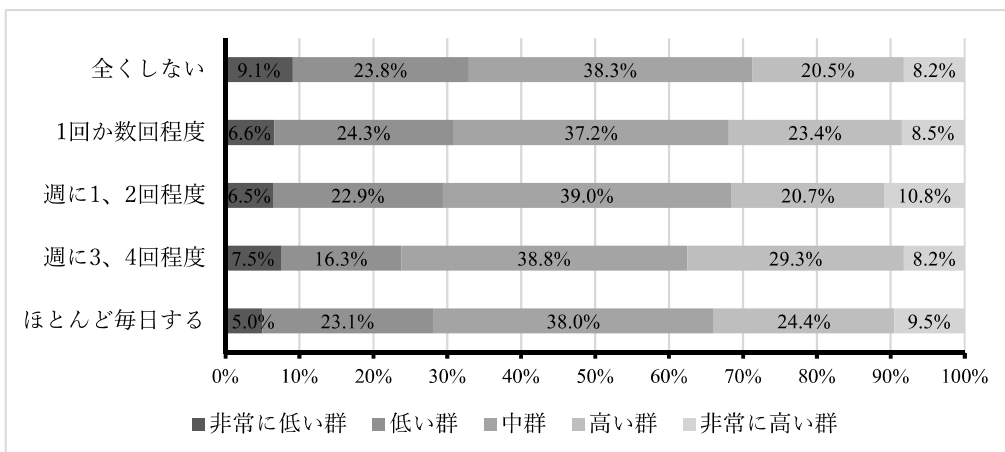


図 11-8 身近な自然体験(緑地などで植物や、動物・昆虫を観察)と謙虚さのクロス集計

※縦軸は身近な自然体験の回答を、グラフ内の5群は謙虚さを示す

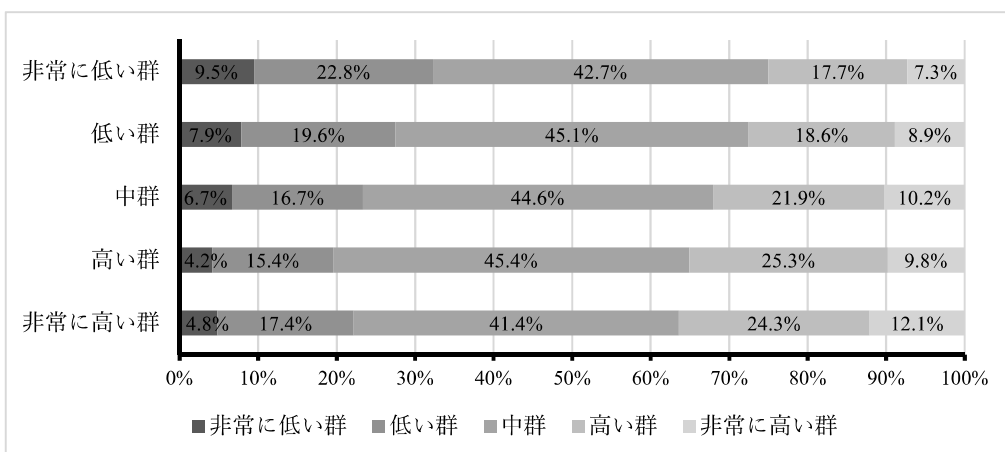


図 11-9 謙虚さと健康状態のクロス集計

※縦軸は謙虚さを、グラフ内の5群は健康状態さを示す

3 謙虚さと COVID-19 禍における気づき

保護者調査の謙虚さに関する項目の合計点を5分割したものと、COVID-19 禍における気づき(小中学生調査問 15: 大切さを感じたこと、「以上のことはどれもなかった」を除く)の回答をクロス集計した。その結果、図 11-10~15 に示す結果が得られた。

COVID-19 の流行によって、多くの小中学校が休校になる、外出自粛など様々な感染症対策が実施され、周りの人間と従来通りの関係性を築くことが難しい状況が強いられている。謙虚さの特徴として、他者のよさがわかる、自己を客観視することが挙げられる。分析の結果、家族の大切さを感じるようになった、学校の大切さを感じるようになった、友達の大切さを感じるようになった、それに対面でのコミュニケーションは大切だと思ふようになったという4項目は、謙虚さが低い場合、該当しない割合が高く、高い場合は割合が多くなることが示された。したがって COVID-19 が流行した状況において、より他者のよさを含めた人間関係の大切さへの気づきや、自己の客観視による物事への気づきにつながったと考えられる。一方、勉強の大切さを感じるようになった、勉強を自らするようになったという2項目は、謙虚さの高さと気づきに関連はみられなかった。COVID-19 が流行した状況においても、勉強は特に制限されておらず、気づきにつながりにくかった可能性がある。

本章では割愛するが、以上のような気づきがあることは、健康状態の高さとも関連することが示された。したがって、身近な自然体験により謙虚さが高まり、COVID-19 禍における気づきにつながり、それが最終的に健康状態の高まりに至ることが示唆された。つまり、謙虚さが子どもの良好な健康状態に重要な役割を果たしている可能性がある。しかしながら本研究の結果は、横断的に測定したものであり、学年や性別の影響を考慮していない。今後はその点も考慮し、分析をすることで、詳細な関連を明らかにすることができると考えられる。

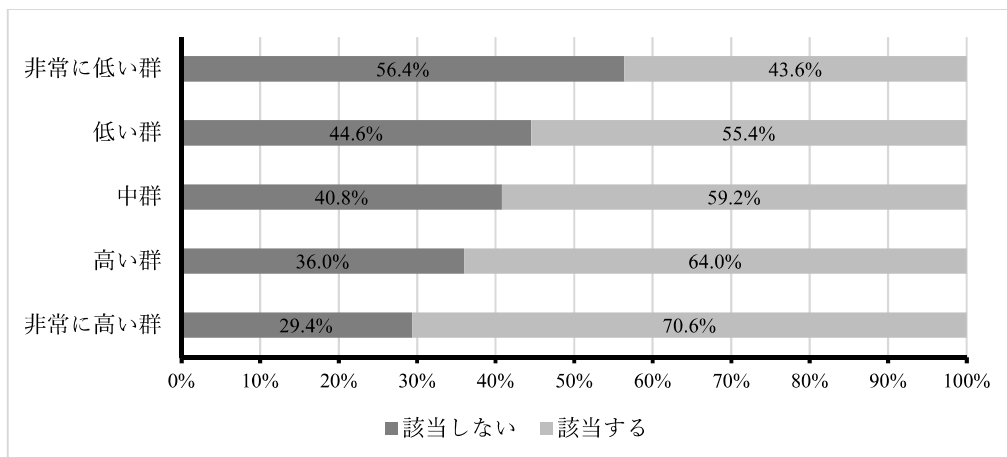


図 11-10 謙虚さと COVID-19 禍における気づき(家族の大切さを感じるようになった)のクロス集計

※縦軸は謙虚さを、グラフ内の2群は COVID-19 禍における気づきを示す

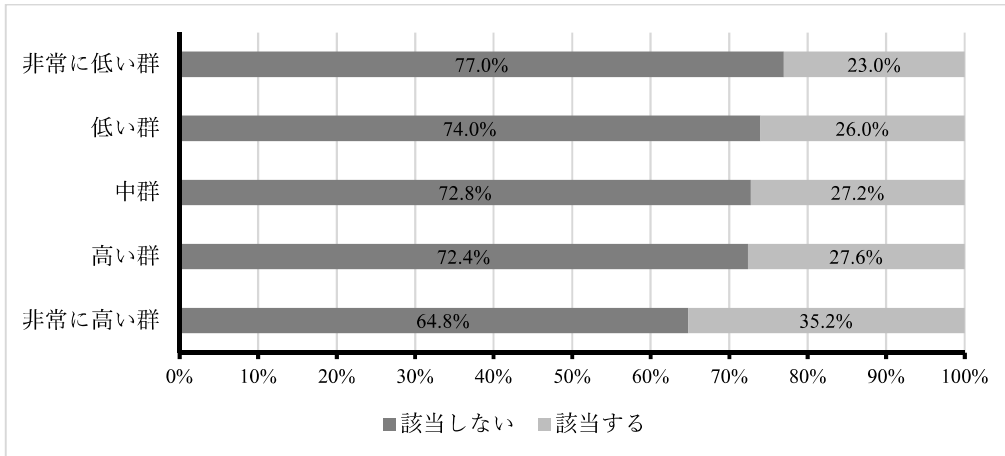


図 11-11 謙虚さと COVID-19 禍における気づき(勉強の大切さを感じるようになった)のクロス集計
 ※縦軸は謙虚さを、グラフ内の2群は COVID-19 禍における気づきを示す

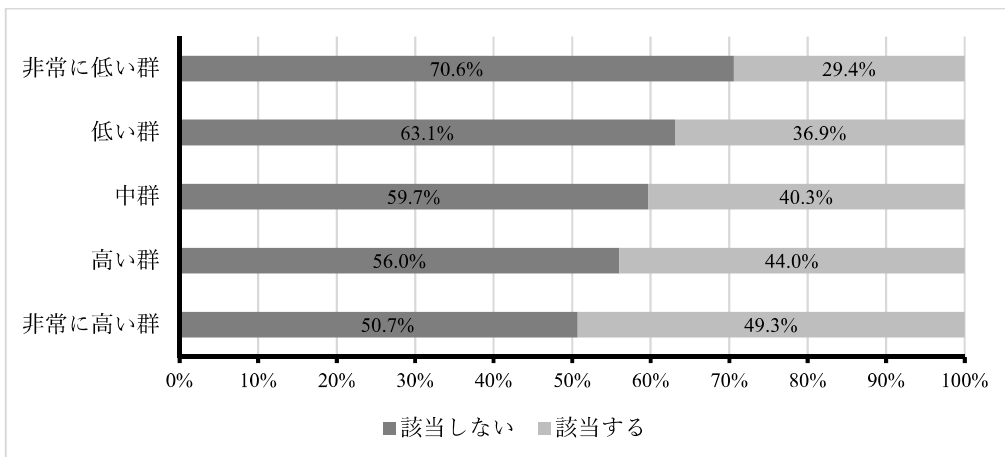


図 11-12 謙虚さと COVID-19 禍における気づき(学校の大切さを感じるようになった)のクロス集計
 ※縦軸は謙虚さを、グラフ内の2群は COVID-19 禍における気づきを示す

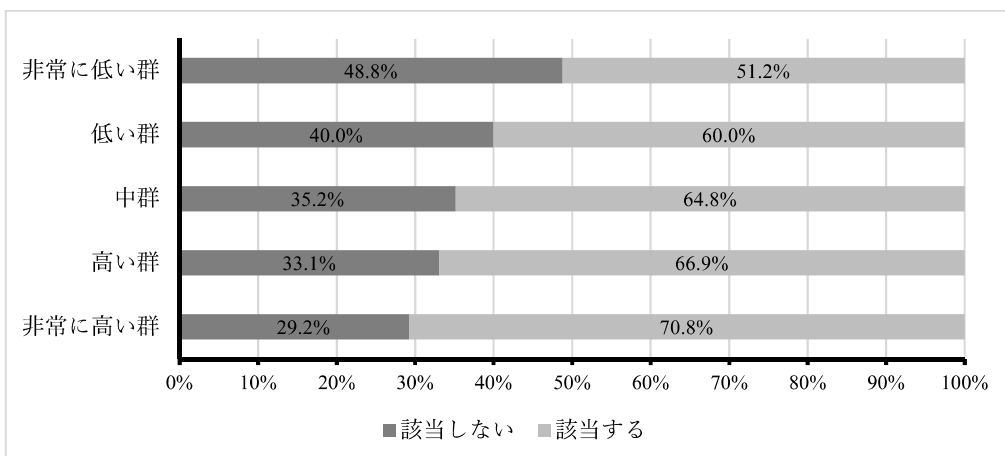


図 11-13 謙虚さと COVID-19 禍における気づき(友達の大切さを感じるようになった)のクロス集計
 ※縦軸は謙虚さを、グラフ内の2群は COVID-19 禍における気づきを示す

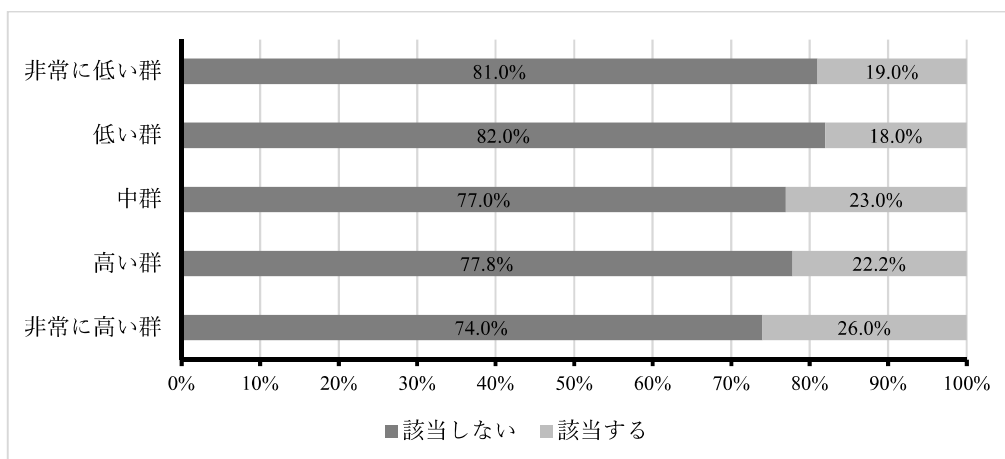


図 11-14 謙虚さと COVID-19 禍における気づき(勉強を自らするようになった)のクロス集計

※縦軸は謙虚さを、グラフ内の2群は COVID-19 禍における気づきを示す

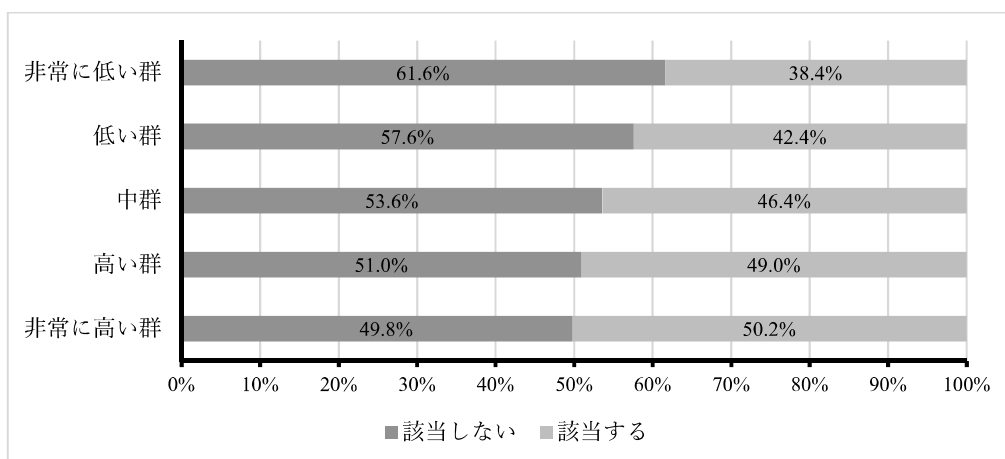


図 11-15 謙虚さと COVID-19 禍における気づき(対面でのコミュニケーションは大切だと

思うようになった)のクロス集計

※縦軸は謙虚さを、グラフ内の2群は COVID-19 禍における気づきを示す

注 1) 本邦では、生徒・児童の謙虚さを測定する尺度が作成されていない。そこで、国内外で成人を対象に謙虚さを測定する尺度を参考に有識者で検討し、尺度項目を作成した。具体的には、Tangney (2011) による謙虚さの鍵となる要素を踏まえつつ、先行研究 [遠藤他 (2015)、橋本・小塩 (2016)、中村他 (2012)、大竹他 (2005)、島本他 (2013)、津田・島井 (2018)、Wakabayashi (2014)] の項目を参考にした。

引用文献

- Davis, D. E., Worthington, E. L., Jr., & Hook, J. N. (2010). Humility: Review of measurement strategies and conceptualization as personality judgment. *The Journal of Positive Psychology, 5*(4), 243-252.
- 遠藤伸太郎・和 秀俊・大石和男 (2015). アスリートの競技力向上および人としての成長を促すポジティブ心理学からのアプローチ 2014 年度笹川スポーツ研究助成 研究成果報告書, 299-305.
- 橋本泰央・小塩真司 (2016). 対人円環モデルに基づいた IPIP-IPC-J の作成 心理学研究, *87*(4), 395-404.
- 中村慎佑・西迫成一郎・森上幸夫・桑原尚史 (2012). 社会的行動における望ましさとは何か?—社会的規範の普遍性と可変性に関する研究 (2) — 情報研究：関西大学総合情報学部紀要, (37), 23-35.
- 大竹恵子・島井哲志・池見 陽・宇津木成介・ピーターソン クリストファー・セリグマン マーティン E. P. (2005). 日本版生き方の原則調査票 (VIA-IS: Values in Action Inventory of Strengths) 作成の試み 心理学研究, *76* (5), 461-467.
- 島本好平・東海林祐子・村上貴聡・石井源信 (2013). アスリートに求められるライフスキルの評価—大学生アスリートを対象とした尺度開発— スポーツ心理学研究, *40* (1), 13-30.
- Tangney, J. P. (2011). Humility. Lopez S. J, & Snyder C. R. (Eds), *The Oxford Handbook of Positive Psychology*. 2nd ed. Oxford: Oxford University Press, pp. 483-490.
- 津田恭充・島井哲志 (2018). 日本人の謙遜は意図的か、それとも自動的か? 日本パーソナリティ心理学会第 27 回大会抄録集, P146.
- Wakabayashi, A. (2014). A sixth personality domain that is independent of the Big Five domains: The psychometric properties of the HEXACO Personality Inventory in a Japanese sample. *Japanese psychological Research, 56*(3), 211-223.